

◎英国国教会、クリスマスとイースターのみ教会開放を検討 英国人の約半数無宗教受け

【クリスチャントゥデイ、10/16/2015】人口の変動や礼拝出席者、教会員が継続的に減少していることを受け、英国国教会は国内の教会のうち歴史のある村の教会を、クリスマスやイースターなどの特別な祝日にしか開けないことを検討していると報じられている。

英国国教会の教会建築検討グループによる報告書によると、多くの教会はもはや持続不可能で、4つの教区に1つは定期的な礼拝出席者数が10人を下回るという。

この報告書は、経済的負担を軽減するため、幾つかの教区の教会をカレンダー上で重要な日と結婚や葬儀の時にのみ使用する「祭礼の教会」に変えることを目的としている。

「祭礼の教会」は、検討グループが提案する「霊的、数量的成長を確保し、公共の用に仕えること」のための広範な変化の一つに過ぎない。

「私たちは、教会を成長させることから離れては、この国の歴史的遺産に対する私たちの大きな責任からくる課題に対して、解決策の一つもないのです」とグループは報告している。

全国社会調査センターが5月に報告した通り、英国国教会は過去30年間にわたって、急激な会員数の減少にひんしている。

調査によると、1983年には英国人口の43%が、英国国教会の信者だと答えているが、2014年にはその割合が17%にまで減っている。現在では、英国人のうち850万人しか英国国教会の信者がいないと報告されている。

宗教的信仰のない人の割合は、英国人口の約半数、49%を占め、1983年の31%を上回った。

移民が増えるにつれて、キリスト教以外の宗教の成長も調査によって明らかにされており、イスラム教は1983年には英国人の0.5%に過ぎなかったが、2014年には5%を占めた。

全国社会調査センターで社会的態度担当リーダーを務めるナオミ・ジョーンズ氏は当時、「ここ10年間で、自分が英国国教会の信者だと答える人の割合はかなり急激に減少し、対照的に無宗教だという人の割合が大きくなりました」と述べた。

「考えられる一つの説明は、英国におけるカトリックと非キリスト教徒の人数が、強い宗教的信条を持つ移民によって増えているということです。もう一つの説明は、過去において宗教は、人々のアイデンティティーの中で卓越した役割を持っていたか

らだということでしょう」

<http://www.christiantoday.co.jp/articles/17323/20151016/church-england-only-open-christmas-easter.htm>

【キーワード】 無宗教、世俗化

D・ボンヘッファー『キリストに従う』(ボンヘッファー選集3) 新教出版社、1996年、
13頁以下

D. Bonhoeffer, *Nachfolge*, München, 1937.

5 【高価な恵み】

安価な恵みは、われわれの教会にとって許すべからざる宿敵である。われわれの戦いは今日、
高価な恵みをめぐって戦われている。

安価な恵みとは、見切品としての恵みのことであり、投げ売りされた赦し・慰め・聖礼典のこ
とである。それはまた、教会の無尽蔵の宝庫のようなものであって、そこから、恵みが浅薄な人々
10 の手によって、無思慮に、また見さかきもなく注ぎ出されるのである。さらにそれは、値段や費
用のない恵みのことである。恵みの本質というもの、勘定があらかじめ永遠に支払われている
というわけであろう。支払いが既に終わっているのであるから、あらゆるものがただで手に入れ
られる。そういう支払いずみの費用というものはまさに無限に大きく、したがってその使用や浪
費の可能性も無限に大きい。安価な恵みではない恵みというものがあったとしたら、それは何で
15 だろうか。

安価な恵みとは、教説・原理・体系としての恵みのことである。一般的真理としての罪の赦し
のことであり、キリスト教的な神観念としての神の愛のことである。この安価な恵みを肯定する
者は、自分の罪の赦しを既に手に入れている。この恵みの教説を奉ずる教会は、それによって既
に恵みにあずかっている。このような教会の中にこの世が見出すものは、教会の罪の安価な隠蔽
20 であるが、教会はその罪を悔いることはないし、またそれから自由になろうという願いは毛頭い
だかない。それゆえに、安価な恵みは、生きた神の言葉の否認であり、神の言葉の受肉の否認で
ある。

(中 略)

高価な恵みは、畑に隠された宝であって、そのためには人間は出かけて行って自分の持物を全
25 部喜んで売り払うのである。それは値段の張る真珠であって、その支払いのために商人は自分
の全財産を犠牲にするのである。それはまたキリストの王的支配であって、そのためには人間は
自分を躓かせる目をえぐり取ることも辞さないものである。さらにそれはイエス・キリストの招
きであって、それを聞いた時弟子たちは網を捨てて従ったのである。

高価な恵み——それは繰り返し探ね求められるべき福音であり、祈り求められるべき賜物であ
30 り、叩かれるべき戸である。

それは、服従へと招くがゆえに高価であり、イエス・キリストに対する服従へと招くがゆえに
恵みである。それは、人間の生命をかける値打がするゆえに高価であり、またそうすることによ
って人間に初めて生命を贈り物として与えるがゆえに恵みである。それは、罪を罰するがゆえに
高価であり、罪人を義とするがゆえに恵みである。恵みが高価であるのは、先ず何よりも、それ
35 が神にとって高価であったから、すなわち、それが神に対して——「あなたがたは、代価を払っ

て買いとられたのだ」〔I コリント六・二〇〕とある通り——み子の生命をその値として支払わしめたからであり、また、神にとって高価なものがわれわれに安値であるということはありませんからである。高価な恵みが恵みであるのは、何よりもまず、神がみ子をわれわれの生命のために高価なものとして惜しみ給うことなく、われわれのために犠牲にし給うたからである。高価な恵みは神の受肉である。

高価な恵みは、この世に対して守られるべき、また犬の前に投げ与えられてはならない神の聖なる宝としての恵みである。それゆえにこそ、それは、生きた言葉としての、すなわち、神ご自身がみこころのままに語り給う神の言葉としての恵みである。み言葉は、イエスに対する服従への恵みに満ちた呼びかけとしてわれわれに届く。また、赦しの言葉として、恐れおののく魂や疲れはてた心のもとに来たる。恵みが高価であるのは、人間を強いてイエス・キリストへの服従のくびきの下に連れ来たるからである。イエスが、「わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽い」と言い給うということこそ、恵みなのである。

(中 略)

キリスト教の版図が拡大し、教会がだんだんと世俗化すると共に、高価な恵みに対する認識は徐々に失われて行った。世界がキリスト教化される一方、恵みはキリスト教的な世界の共通財産になってしまった。恵みは安価に手に入れるべきものであった。しかしローマ教会は、最初の認識の残滓をまだ持っていた。修道院制度というものが教会と袂をわかたず、教会の知恵が修道院の存在を忍耐深く受け入れたということは、全く重大な意味のあることであった。それは教会のへりのような場所であったが、恵みが高価であるということ、恵みが服従を包含するということに対する認識が明確に保持されている、そういう場所であったのである。人々は自分の持ち物を全部キリストのゆえに捨て去り、毎日の修練においてイエスの厳しい戒めに従おうと努めた。こうして修道院生活は、キリスト教の世俗化に対する、恵みを安価なものにすることに対する、生きたプロテストとなった。しかし教会は、このプロテストを耐え忍び、それとの間に決定的な決裂状態を生み出さないことによって、そのプロテストを相対化し、さらにその上、このプロテストから自分自身の世俗化した生活の是認をも獲得した。というのは、今や修道院生活は、教会の一般大衆には義務づけることのできないような、個々人の特殊なわざとなったからである。イエスの戒めの妥当性を、ある一定の特別に能力のある人々の群れに不運にも限定したことは、キリスト教的な従順のわざを最高のもので最小のものに分離するという結果を生んだ。それに伴って、教会の世俗化を激しく攻撃するごとに、教会の内部における修道院的な道の可能性を指示することができるようになったが、その道と並んで、もっと楽な道を選ぶ別の可能性がはっきりと是認された。こうして、高価な恵みに関わる原始キリスト教の理解に対する指示は、ローマ教会においては修道院制度によって保持されなければならなかったわけであるが、矛盾したことではあるけれども、それは教会の世俗化を自ら再び最終的に是認する結果となったのである。にもかかわらず、修道院制度の決定的な誤謬は——イエスのみこころの内容的な誤解はとも角として——厳しい服従の恵みの道を歩んだということにあつたのではない。むしろ、修道院制度は、その道を

ごく少数の者たちの自由な特殊のわざへの道たらしめ、それによってその道に特殊な功績が帰せられることを要求するということによって、キリスト教的なものとの本質的な開きを生んだのである。

5 神がその僕マルティン・ルターによって、宗教改革において、純粋な高価な恵みについての福音への覚醒を与え給うた時、神はルターを修道院を経て導き給うた。ルターは修道士であった。彼はすべてのものを捨て、完全な従順を捧げてキリストに従おうとした。彼はこの世を捨て去って、キリスト教的なわざにたずさわった。彼は、従順な者のみがよく信じうるということを知っていたからこそ、キリストとその教会に対する従順を学んだのである。修道院への招きがルターに求めたものは、彼の全生活をそれに傾注するという犠牲であった。ルターはその自分の道を歩

10 んで行き、神ご自身に突き当たって挫折を経験した。神は彼に、イエスに対する服従は、個人の功績を積もうとする特殊なわざではなくて、すべてのキリスト者に対する神の戒めであるということ、聖書を通じて示し給うた。服従という謙遜なわざは、修道院制度において、聖人の功績を積む行為となってしまっていた。服従する者の自己否定は、ここにおいて、敬虔な者の究極的な霊的自己主張としての正体をあらわした。そうすることによって、この世は修道士の生活のま

15 ったただ中に闖入して、そこで最も危険な仕方で再び活動した。修道士のこの世からの逃避は、最も洗練したこの世への愛であると見抜かれた。このような敬虔な生活の究極的な可能性の挫折の中で、ルターは恵みというものを把握したのである。彼は、修道士の世界が崩壊した時、神の救いのみ手がイエス・キリストにおいて差し伸べられているのを見た。彼はその神のみ手を、「どんなに立派な生活を送ろうとも、われわれのわざは空しい」ということに対する信仰において捕え

20 た。そこで彼に賜物として与えられたのは、高価な恵みであった。その恵みが彼の全存在を打ち砕いたのである。彼は、自分の持っていた網をもう一度打ち捨てて、従って行かなければならなかった。最初修道院にはいった時、彼はすべてのものを捨てたけれども、ただ自分自身、彼の敬虔な自己というものだけは捨てなかった。しかし今やこの自己も、彼から取り去られたのである。彼は自分の功績によってではなく、神の恵みによって従った。〈お前はまさに罪を犯した。しかしその罪はすべて赦されたのだ。お前がいたところにこれからもとどまっているがよい〉。ルターはこう言われたのではない。ルターは修道院を去って、この世へと帰って行かねばならな

25 かった。それは、この世それ自身が善であり、聖であると考えられたからではない。修道院もまた決してこの世と異なるところではなかったからである。

ルターが修道院を出てこの世へと帰って行ったその道は、原始キリスト教以来、この世に向かって加えられた最も厳しい攻撃を意味した。修道士になった時にこの世に向かって発した宣戦布告は、この世に帰って行ったルターによってこの世がつけつけられた宣戦布告に比べれば、児戯にも等しいものであった。今や攻撃は真正面から加えられることになったのである。イエスに対する服従の生活は、この世のまっただ中でなされねばならなかった。修道院の生活という特別な環境に置かれ、またそのために便宜をも得て、特殊なわざとしてなされたことが、今や、この世

35 にあるすべてのキリスト者にとって必然的なこと・戒めとして受けたこととなった。イエスの戒

めに対する完全な従順が、毎日の職業生活の中で行ないとしてあらわされねばならなかった。こうして、キリスト者の生活とこの世の生活との間の相剋は、見のがすべからざる様相を呈して深まって行くばかりであった。キリスト者はこの世に向かって肉迫して行った。それはもう白兵戦であった。

5 ルターの行動について、彼は純粋な恵みの福音の発見と共に、この世においてはイエスの戒めに対する従順が免除されることを宣言したのだと考え、また、宗教改革が発見したものは、赦しの恵みによってこの世を聖別し、義と認めることであったと考えることほど、致命的なルターの誤解はない。ルターにとっては、キリスト者がこの世でたずさわる職業は、その職業においてこの世に対するプロテストが最も鋭くなされていることによって、むしろ義とされることを経験する。キリスト者のこの世での職業がイエスに対する服従において果たされる限りにおいてのみ、
10 キリスト者は福音から新しい義を受け取っている。罪の義認ではなくて罪人の義認こそ、ルターの修道院からの帰還の根拠であった。ルターに送られたものは、高価な恵みであった。恵みであったというのは、それが渴いた土地に注がれた水であり、不安に対する慰めであり、みずから選んだ道のとりことなっていた境涯からの解放であり、すべての罪の赦しであったからであり、その恵みが高価であったというのは、それが行為のわざを免除せずに服従への招きを無限に鋭くしたからである。しかし、高価な恵みは、まさに高価であった時にこそ恵みであり、恵みであった時にこそ高価であった。そういうことが、宗教改革の福音、すなわち罪人の義認の秘義であったのである。

にもかかわらず、宗教改革の歴史上の勝利者は、いつまでもルターが得た純粋で高価な恵みに
20 関する認識ではなく、恵みを一番安価に手に入れることのできるような場所を敏感にもかぎつける人間の宗教的本能であった。そこで必要だったものは、強調点を軽く、また目立たない程度に変えることだけであったが、実はそれによって最も危険かつ有害なことがなされたのである。ルターが教えたことは、人間は結局自己自身を追求するものであるから、どんなに敬虔な道を歩み、またどんなに敬虔なわざをなそうと、それによって神の前に立ちつづけることはできないということであった。ルターはこのような危急の中で、信仰においてすべての罪を自由かつ無条件に赦す赦しの恵みを把握した。その時彼が知ったのは、彼にとってこの恵みは自分の生命を賭ける値
25 打のするものであり、しかも恵みは日々それを求めているということであった。というのも、彼はもちろん恵みによって服従を免除せられたのではないし、恵みを受けて初めて服従へと押しやられたからである。ルターが恵みについて語る時、彼は、恵みによって初めてイエスに対する全
30 き従順の中に入れられている自分自身の生活のことを同時に考えていた。そういうふうな恵みについて語る以外の語り方を、彼は知らなかった。ルターの語ったのは、恵みだけが赦しを与えるということであったし、彼の弟子たちも、言葉の上では同じように繰り返し語ったのであるが、ただ一つ違っていたのは、ルターがいつも自明のこととして考えていたこと、つまり服従ということ——それは、彼がいつも、自分は恵みによってイエスに対する最も厳しい服従へと導かれた
35 一人の人間なのだということを語ったがゆえに、それ以上にもはや言う必要のなかったことなの

であるが——そのことを弟子たちが省略して、考えもせず言いもしなかったということである。したがって弟子たちの教説は、ルターの教説から見て論難の余地のないものではあったが、しかもそれは、この地上における神の高価な恵みの啓示としての宗教改革の終局かつ否定となった。この世における罪人の義認は、やがて罪とこの世の義認に変わった。高価な恵みは、やがて服従

5 なしの安価な恵みに変わったのである。

どんなに立派な生活を送ろうとも、われわれのわざは空しいということ、それゆえに神のみもとでは、「罪を赦す恵みと愛顧のほかは」何ものも効力がないということ、ルターは言った。そういうことを、ルターは、この瞬間に至るまで、さらにその瞬間に新しく、イエス・キリストに対する服従へと、自分の持っていたすべてのものの放棄へと召されていることを自覚した者として、

10 言ったのである。恵みの認識は、彼にとって、自分の生活にあらわれた罪との究極的で決定的な断絶であり、決してその是認ではなかった。またその認識は、赦しを把握することによって、恣意的な生活に対する究極的で決定的な拒絶であり、そこにおいてこそ初めて、本来的に服従への真剣な招きであった。罪の認識はまた、彼にとって常に総括的な「結論」であったが、もちろんそれは神からの結論であって、人間の結論ではなかった。しかしこの答えは、ルターの後継者

15 たちによって、一つの計算のための原則的な前提とせられた。ここに災いをもたらす根があった。恵みがもしキリストご自身から贈られたキリスト教的生活の「結論」であるならば、この生活は服従を免除される時は決してない。しかし、もし恵みがわたしのキリスト教的生活の原則的な前提であるならば、それによってわたしは、この世の生活でわたしのおかす罪の義認をあらかじめ

20 恵みによって義とされている。わたしは従来通りに自分の市民的・この世的存在をそのまま維持する。あらゆることが昔のままにとどまる。そしてわたしは、神の恵みが自分をおおっていることで安心してよいのである。この世全体は、この恵みの中で「キリスト教的に」なった。しかしキリスト教は、この恵みの中で、かつてなかったほど世俗化してしまった。キリスト教的な職業生活と市民的・この世的なそれとの間の闘争は止揚された。キリスト教生活が成り立つのはま

25 さに、わたしがこの世に、この世と同じように生きているということ、どのような事態に置かれようとこの世からわたしを離すものはないということ、もちろんわたしをこの世から離すことは——恵みのために——許されないということ、そこで自分の罪の赦しを確かめるために、いつかこの世の領域を去って教会の領域へとおもむくということ、まさにそのようなことにおいてである。わたしは、イエスに対する服従から、安価な恵みによって解放された。この安価な恵みとい

30 うものは、服従の最も厳しい敵であり、真の服従を憎悪し、侮辱するに違いないものである。前提としての恵みが安価な恵みであり、結論としての恵みが高価な恵みである。一つの福音的な真理がいかにかに語られ、いかにかに用いられるかということに、どういう意味で問題があるかということ

を認識するのは、恐るべきことである。ここで言われているのは、恵みによってのみ義とされるという同じ言葉である。しかもその同じ原則の誤用が、その本質の完全な破壊を生むのである。

35 知識の探求に明け暮れたその生涯の終局に、ファウストが「われわれは何も知りえないのだと

ということが、わたしには分かった」と言う時、それこそ結論なのであるが、しかしそれは、こういう言葉が自分の怠惰を正当化するために最初の学期に学生によって使われる場合とは全く違う（キルケゴール）。その言葉は結論としては真理であるが、前提としては自己欺瞞である。その意味は、一つの知識はそれが獲得された実存から切り離されることはありえないということである。

- 5 自分の持っていたものをすべて放棄してイエスに対する服従に生きる者のみが、ただ恵みによって義とされると言うことが許される。彼は、服従への招き自身を恵みとして知り、また恵みをこの招きとして知る。しかし、この恵みによって服従をまぬがれようとする者は、みずからを欺くのである。

E・ベートゲ編『ボンヘッファー獄中書簡集』新教出版社、1988年

E. Bethge (hrsg.), *Widerstand und Ergebung. Briefe und Aufzeichnungen aus der Haft*, München, 1970.

5 エバハルト・ベートゲへ

テーゲル四四年四月三十日

(中 略)

われわれがこの時をいっしょに生き抜き、お互いに助け合うことができたなら、われわれ二人
10 にとってはどんなに良かっただろう。しかし、そうではなくて、めいめいが一人でここをくぐり
抜けなければならないということは、「さらに良い」ことかもしれない。実際僕は、毎朝毎晩聖書
を読む時、またそのほかの時も日中、しばしば君のことを考えているが、それ以外に今君の助け
になることを何一つできないのが辛い。僕のことは本当に何も心配する必要はない。僕は元気過
15 ぎるほどだし、もし君が面会に来たらびっくりすることだろう。ここの連中は、僕から「非常な
静けさが光を放っている」とか、僕が「いつも本当に明るい」とかくり返し言うので——君もそ
う思うだろうが、僕はくすぐったくて仕方がない——時たま自分自身について反対の経験をして
も、それが全くの思い違いであると感じなければならぬほどだ（むろん、本当にそう思ってい
るわけではないよ）。君を驚かせ、あるいはもしかしたら心配させるかもしれないのは、せいぜい、
僕の神学的思想とその帰結ぐらいのものだろう。そしてこの点については、今君と別れているこ
20 とが僕には本当にとっても残念だ。というのは、ある問題について君以外の誰と、それが僕にとっ
て解明を意味するような具合に話し合えるか、僕には見当もつかないからだ。

僕を絶えず動かしているのは、そもそもキリスト教とは今日のわれわれにとって何であるか、
また、キリストとは誰であるか、という問題なのだ。このことを、神学的な言葉であれ、敬虔な
信仰の言葉であれ、言葉を通して人間に語ることのできる時代は過ぎ去った。同じように、内面
25 性と良心の時代も、ということはつまり、およそまさしく宗教の時代が過ぎ去った、ということ
だ。われわれは完全に無宗教（religionslos）の時代に向かって歩んでいる。人間はもはや、今そ
うであるように単純に宗教的ではありえない。本心から自分を「宗教的」と称する人たちも、そ
れを実際の行為には決して現わさない。察するに彼らは、「宗教的」ということで何か全く別のこ
とを考えているようだ。

30 しかしわれわれの一九〇〇年に及ぶキリスト教の宣教と神学の全体は、人間の「宗教的先験性」
の上に築かれている。「キリスト教」は常に「宗教」の一つの形（恐らく真の形）であった。とこ
ろがある日、この「先験性」なるものは全く存在せず、むしろ人間の歴史的に条件づけられた、
過ぎゆく一つの表現形式であったということが明らかになり、したがって人間が実にラディカル
に無宗教になる時、——多かれ少なかれ既にそのような事態が起こっていると僕は思う（たとえ
35 ば、この大戦がこれまでのあらゆる戦争と異なって「宗教的」反動といったものを呼び起こさな

いのはどうしてだろうか) ——その時、それは「キリスト教」に対して何を意味するのであろうか。われわれのこれまでの全「キリスト教」からは基礎が奪い取られ、われわれが「宗教的に」語り合えるのはただいくばくかの「最後の騎士たち」か、あるいは何人かの知的に不誠実な人々だけになる。そういうのが少数の選ばれた人々だというのであろうか。自分たちの商品売りつけるために、われわれは選りにも選ってこのように疑わしい一群の人々を、躍気になって怒ったり腹を立てたりしながら、抛り所とすべきだというのか。われわれはいくばくかの不幸な人々をその弱みにつけこんで襲い、彼らをいわば宗教的に凌辱すべきだというのであろうか。われわれがすべてこういったことを望まず、結局キリスト教の西洋的形態をも完全な無宗教性の前段階としてのみ判断しなければならないとすれば、その場合われわれにとって、教会にとって、いかなる状況が成立するのであろうか。どのようにしてキリストは無宗教者にとっても主となりうるのか。無宗教的なキリスト者は存在するのか。宗教がキリスト教の一つの衣服にすぎないとすれば——そしてこの衣服もさまざまな時代に非常に多様な外見を示していたのだが——無宗教的キリスト教とは何であろうか。この方向で考え始めた唯一の人であるバルトもやはり、この考えをその後徹底して考え抜くことをせず、結局のところ、本質的には復古にとどまったところの啓示実証主義のようなものになってしまった。およそ無宗教的な労働者や一般の人々にとっては、ここでは決定的なことは何一つ得られなかった。答えられなければならぬ問いは、無宗教の世界において教会・各個教会・説教・礼典・キリスト教的生活といったことが何を意味するのか、ということであろう。われわれはどのようにして——宗教なしに、すなわち、まさに形而上学や内面性等々という時代に制約された諸前提なしに、神について語るのであるか。われわれはどのようにして「この世的に」「神」について語るのであるか(あるいは、もしかしたら、従来のようにそれについて「語る」ということはもう決してできないのかもしれない)。いかにしてわれわれは「無宗教的・この世的に」キリスト者であるのか。自分たちを宗教的に特権を持った者として理解することなく、むしろ全くこの世に属している者として、いかにしてわれわれは、教会、すなわち召し出されている者であるのか。そうなるとキリストはもはや宗教の対象ではなく、全く別な何かであり、真にこの世の主である。しかし、これは何を意味しているのか。無宗教性の中では、礼拝とか祈りは何を意味するのか。ここで秘義保持の規律(Arkandisziplin)ないしは究極以前のものと究極のものとの区別ということが(君は既に僕のこの考えを知っているね)、新たに意義を獲得することになるのであろうか。

ちょうど手紙を託することができるので、今日はここで中断しなければならない。二日以内にこのことについてはさらに書くことにしよう。多分、君は僕の言おうとすることは大体分かってくれるだろうし、それが君を退屈させることもないと望んでいる。その間、元気で！ いつも反響なしに書くというのは容易ではない。もしそのためにいくらか独りごとじみてきても、かんべんして欲しい。真実に君のことを思っている、

君のディートリッヒ

僕は本当に、君が手紙をくれないからといって君を責めたりはしないよ。君には他にやること
が多すぎるのだから。

もう少し書き続けることができるようになった。——割礼が義認の条件であるかどうかという
パウロの問いは、僕の考えるところによると、今日では、宗教が救いの条件かどうかということ
5 になる。割礼からの自由とは、宗教からの自由ということでもある。「キリスト教的本能」のよう
なもの僕を宗教的な人間よりも無宗教的な人間の方に多くひきつけるのはなぜか。しかも全く
伝道的な意図をもってではなく、むしろ「兄弟として」と言いたいくらいなのだ！僕は、宗教
的な人間に向かっては神の名を口にすることをしばしばはずかしく思う。——なぜなら、僕には
この場合、神の名が何となくいつわりの響きを持つように思われるし、自分自身がわれながら何
10 か不誠実に思われるからだ（特にひどいのは、他の人たちが宗教的用語で話し始める時で、僕は
その時ほとんど完全に口をつぐむ。何だかもやもやした感じになり、不決になるのだ）。——それ
に反して僕は、無宗教的な人に対しては、時おり全く安んじて自明なことのよう神の名を口に
することがある。宗教的な人間は、人間の認識が（しばしば考えることをなまけるために）行き
づまるか、人間の諸能力が役立たなくなると、神について語る。——しかしそれは、もともと
15 つも、急場を救う機械仕掛ノ神（*deus ex machina*）だ。それを彼らは解決しがたい問題の見せか
けの解決のためか、もしくは、人間が失敗した時の力として、したがって常に人間の弱さを食い
ものにしながら、つまり人間の限界の所で登場させる。したがって、そういうことが必要であり
続けるのは、ただ人間が自分の力で限界をさらにいくらか押し広げて、機械仕掛ノ神が余計なも
のとなるまでに限る。だが、およそ人間の限界について語ることが、僕には疑問になってきたの
20 だ。（人間は、今日もうほとんど死を恐れなくなったし、罪もほとんど理解しなくなった。だとす
れば、死や罪はなお真の限界であろうか。）われわれは、そうすることによってびくびくしながら
神のための場所をあけておこうとしていたにすぎないように、僕には思われてならない。——僕
は、限界においてではなく真唯中において、弱さにおいてではなくて力において、したがって死
や罪を契機にしてではなく生において、また人間の善において神について語りたいのだ。限界に
25 ぶつかった時は沈黙して、解決し難いことは未解決のままにして置くことがずっと良いように思
われる。復活信仰は死の問題の「解決」であるのではない。神の「彼岸」は、われわれの認識能
力の彼岸ではない！認識論的超越性は、神の超越性とは無関係だ。神はわれわれの生活の真唯
中において彼岸的なのだ。教会は、人間の能力の及ばない所や、限界にではなく、村の真中に立
っている。それが旧約聖書的ということであり、その意味では、われわれはまだ新約聖書を旧約
30 聖書から読むことがあまりにも少なすぎる。こうした無宗教的キリスト教がどのような外見を呈
し、またどのような形態を取るかについて、僕は今、熟考している。近くそのことについてもっ
と書くことにする。今東と西の真ん中にいるわれわれにこそ、この点で、ある重大な使命が与え
られることになるだろう。

さあ、本当に終りにしなくてはならない。これらすべてについて一度君の言葉を聞いたら、ど
35 んなにすばらしいだろう。それは僕にとってはとても大きな意味を持つことになるだろう。おそ

らく君が思うよりもはるかに多くの意味をね。——それはそうと、折があったら、箴言二二・一
一、一二を読み給え。そこには、敬虔でカモフラージュした逃避に対する歯どめがある。

5 エバハルト・ベートゲヘ

テーゲル四四年六月八日

(中 略)

だいたい十三世紀に始まっている（その発端の時点に関する論争に加わるつもりはないが）人
10 間の自律の方向を目指す運動は（この場合僕が考えているのは、科学・社会および国家生活・芸
術・倫理・宗教などの中で、この世界がそれによって生きかつ自らを処理しているところの諸法
則の発見のことだが）、われわれの時代においてある種の完成に達した。人間は、あらゆる重要な
問題において、「神という作業仮説」の助けをかりることなしに自分自身を処理することを学んだ。
15 科学と芸術と倫理の問題においてこれは自明のこととなり、もうほとんどそれに触れようとする
人はいない。しかし、約百年来、このことは宗教的な問題にも加速度的にあてはまるようになっ
た。いっさいは、「神」なしにやれるし、しかも以前と全く同じようにうまく行くことが分かった。
ちょうど科学の領域におけると同じように、一般の人間の領域においても、「神」はどんどん生活
から追い払われ、地盤を失っている。

カトリックとプロテスタントの歴史記述は、このような発展の中には神からの、またキリスト
20 からの大きな離反が見られる、とする点で今のところ一致しており、それらがこのような発展に
対抗するために神とキリストをひっぱり出して利用すればするほど、この発展それ自体は自らを
ますます反キリスト教的なものとして理解するようになる。自己自身とその生命法則とを自覚するに
至った世界は、われわれには不気味に思えるほど、自信を抱いている。間違った発展や失敗がい
ろいろあっても、それらがその進むべき道と発展の必然性について疑問を抱かせることはできな
25 い。むしろ、雄々しい冷静さで甘受される。今行なわれている戦争のような事件でさえも例外で
はない。ところで、このような自信に対抗して、キリスト教的弁証論がさまざまな形で登場して
来た。人はこの成人した世界（*mündig gewordene Welt*）に向かって、世界は「神」という後見人
なしには生きられないということを証明しようと試みている。たとえすべてのこの世的問題にお
いては既に降伏したとしても、いわゆる「究極的な問題」——死・罪責——は依然として残って
30 おり、それらに対しては、ただ「神」のみが答えを与えることができるし、そのためには神や教
会や牧師が必要だというのだ。したがって、われわれはある意味で、人間のこうしたいいわゆる究
極的な問題によって生計を立てているわけだ。しかしいつの日か、それらがもはやそのようなも
のとしては存在しなくなるか、あるいはそれらもまた「神なしに」答えられるようになったなら
ば、どういうことになるのか？ 実際、たしかに、キリスト教神学の世俗化された挿し木のよう
35 なもの、つまり、実存哲学者や精神療法家が出現して、確信を持ち・満足している幸福な人に向

かって、君は本当は不幸なのだ、しかも絶望しているのだとか、君は困窮の中におちいっていることに気づこうとしていないだけだ、君はそのことを全く知らず、そこから救い出せるのは自分たちだけだ、と教えている。健康・力・確信・単純さのあるところ、そこに彼らは甘い果実をかぎつけ、それにかじりつき、そしてその中に破滅のもとになる卵を産みつけるのだ。彼らはそのようにして人間を先ず絶望に追いやることを狙い、その後でうまく賭けをものにする。これは世俗化されたメソディズムだ。それが獲得するのは誰か？ それは少数の知識人、退廃した人々、また、自分自身が世界中で最も重要だと考え、したがって自分自身のことにかかりきりになっている人々のたぐいだ。日常生活を、仕事と家庭と、さらにいろいろな気晴らしの遊びごとで過ごしている単純な人々には関係がない。彼らは、自分が実存的に絶望していると考えたり、自分のささやかな幸せを「困窮」や「憂慮」や「災い」といった観点から考えたりする時間もないし、その気もない。

この世の成人性に対するキリスト教弁証論の攻撃を、僕は、第一に無意味であり、第二に下劣であり、第三に非キリスト教的だと考えている。無意味だというのは——その攻撃が、大人になった人間を思春期に引き戻す試み、すなわち、事実上もはやそれに依存していないような事柄にいつまでも彼を依存させ、彼にとって事実上もう問題ではなくなっているような問題の中にひきずりこむ試みのように思われるからだ。下劣だというのは——一人の人間にとって無縁で、進んで肯定されたわけではない目的のために、ここでは彼の弱さが利用されているからだ。非キリスト教的だというのは——キリストが人間の宗教性のある特定の段階、すなわち、人間的法則と混同されているからだ。この点については、後でなお詳しく述べよう。(後略)

20

エバハルト・ベートゲヘ

テーゲル 四四年七月十六日

25 (中 略)

さて、われわれのテーマについて、またいくつかの考えを書く。僕はやっと、聖書の諸概念の非宗教的解釈に徐々に取りかかっている。僕には、既に解決できたというよりも、課題のほうがずっと多く見えている。歴史的なことについて書けば、世界の自律へと導いているものは、一つの大きな発展だ。神学の分野では、先ずシャーベリーのハーバートが宗教的認識のためには理性で十分だと主張した。道徳学においては、モンテーニュ、ボーダンが戒めの代りに生命法則を置いている。政治学においては、マキャヴェリが、政治を一般道徳から解放し、国家理性の教説を基礎づけた。後になって、内容的には彼とは非常に違っているが、人間社会の自律という方向ではやはり彼と一致しているH・グロティウスが彼の自然法を、「タトエ神ガイナクトモ」(esti deus non daretur) 妥当性を持つ国際法として提示している。最後に哲学が終止線を引いた。すなわち、一方ではデカルトの理神論で、世界は神の介入がなくても自分から運行している有機体であると

35

いう。他方ではスピノザの汎神論で、神は自然であるという。カントは根本的には理神論者で、フィヒテとヘーゲルは汎神論者だ。至るところで、人間と世界の自律が思想の目標になっている。

(自然科学においては、事柄は、明らかにニコラウス・クザーヌスとジョルダナーノ・ブルーノ、および世界の無限性に関する彼らの——「異教的な」——教説で始まる。古代の宇宙は、中世の被造的世界と同様に有限である。無限の世界というのは、——それがどのように考えられているとしても——「タトエ神ガイナクトモ」それ自体の中に基礎を置いている。もっとも、現代物理学は、再び世界の無限性を疑っている。しかし、その有限性についてのかつての観念に帰ることはしない。) 道徳学的・政治学的・自然科学的な作業仮説としての神は、廃棄され、克服された。だが、哲学的・宗教的な作業仮説としての神も同様だ(フォイエルバッハ!)。これらの作業仮説を倒れるにまかせ、あるいは、とにかく可能な限り広くこれらを排除することは、知的誠実さの一つなのだ。建徳的な自然科学者とか医学者などというものは、両棲動物みたいなものだ。

それでは神はなおどこに場所を持っているのであろうかと、不安な心を抱く人々は問い、そして彼らはこの問いに対してどう答えていいか全く分からないので、自分たちをこのような苦境におとし入れた発展全体を呪う。狭くなり過ぎた場所から逃れるためのさまざまな非常口については、既にかいた。なお付け加えて中世への危険サトンボガエリ(salto mortale)が考えられるかもしれない。しかし、中世の根本原理は、教権主義という形の他律なのだ。そこへの復帰は、知的誠実さを犠牲にして初めて得られる絶望の歩みに過ぎない。それは、

「ああ、そこに帰る道、

子供の国へのはるかな道がわかっていたら」

という歌にあるような一つの夢であって、そんな道はない。——いずれにしても、内的な誠実さを勝手に諦めることによってではなく、マタイ八・三の意味において、すなわち悔改めによって、ということつまり、最後の誠実さによって、道は開かれる! そしてわれわれは——「タトエ神ガイナクトモ」——この世の中で生きなければならない。このことを認識することなしに誠実であることはできない。そしてまさにこのことを、われわれは神の前で認識する! 神ご自身がわれわれを強いてこの認識に至らせ給う。このように、われわれが成人することが神の前における自分たちの状態の真実な認識へとわれわれを導くのだ。神は、われわれが神なしに生活を処理できる者として生きなければならないということを、われわれに知らせる。われわれと共にいる神とは、われわれを見すてる神なのだ(マルコ一五・三四)。神という作業仮説なしにこの世で生きるようにさせる神こそ、われわれが絶えずその前に立っているところの神なのだ。神の前で、神と共に、われわれは神なしに生きる。神はご自身をこの世から十字架へと追いやられるにまかせる。神はこの世においては無力で弱い。そしてまさにそのようにして、ただそのようにしてのみ、彼はわれわれのもとにおり、またわれわれを助けるのである。キリストの助けは彼の全能によってではなく、彼の弱さと苦難による。このことは、マタイ八・一七に全く明かだ。

ここに、あらゆる宗教に対する決定的な相違がある。人間の宗教性は、困窮に陥った時に彼をこの世における神の力に向かわせる。神は機械仕掛ケノ神だ。聖書は、人間を神の無力と苦難に

っているが、勘弁してくれ給え。しかし、多分君だけがまた僕の考えをはっきりさせたり簡略にしたりするのを助けてくれるだろう。僕がこういったことについて君に語りかけることができ、そして君がすぐ問うたり答えたりするのを聞けるような具合だといいいのだが！

5 アドレスは今度は、ベルリン＝フリードリッヒスハーゲン、ヴィルヘルム通り五八、H・リンケだ。——君がもう峠を越えたことを、僕は非常に嬉しく思っている。われわれはこの頃、ほとんど毎晩、一時半に起こされる。これは辛い時刻で、どうやらそれが仕事の妨げにもなっているようだ。

間もなく君からの便りがあればと望んでいる。ご機嫌よう、真実で感謝に満ちた思いをもって君に挨拶を送る

10

常に君のディートリッヒ

世界大戦のただ中から（3）

— D. ボンヘッファー —

Overview

- ・ ボンヘッファーの生涯
- ・ ボンヘッファーの神学
- ・ 影響史



ボンヘッファーの 生涯

誕生

- ・ 1906年
- ・ プレスラウ（現在、ポーランドのプロツラフ）で生まれる。父カール・ボンヘッファー（精神医学の教授）がベルリン大学に招聘されたため、ベルリンに移り住む。
- ・ 8人兄弟姉妹の6番目。ボンヘッファー家は、ヒトラー政権への抵抗運動に深く関与していた。

神学の学び

- ・ 1923年、17歳でチュービンゲン大学で神学を学び始め、後にベルリンに戻る。
- ・ 1927年、神学博士の学位を取得（21歳のとき）。
- ・ 1928年、1年間、スペインのバルセロナにあるドイツ人教会で牧師補として働く。
- ・ 1929年、ベルリンに戻り、大学教授資格論文に取り組む。
- ・ 1930年、アメリカのユニオン神学校に留学。**エキュメニカル運動**との出会い。

牧師・神学教師として

- ・ 1931年、ベルリン大学の私講師として組織神学の講義を始める。
- ・ 1933年、ナチ政権が成立。ボンヘッファーは、ヒトラーが演出しようとしたメシアニズムの問題を、早い時期に見抜いていた。
- ・ 1934年、**告白教会**によって「バルメン宣言」が発表される。「教会闘争」の開始。
- ・ 1935～40年、フィンケンバルデの牧師研修所で教える。
- ・ 1937年、フィンケンバルデの牧師研修所が国家秘密警察（ゲシュタポ）によって封鎖される。以降、地下活動に。

ナチズムの嵐の中で

- ・ 1938年、牧師がヒトラー個人に対し忠誠の宣誓を求められる。多くのキリスト者が「健全な民族感情」を示す。
- ・ 1938年11月9日、**水晶の夜**。ナチの突撃隊やSS隊員が、各地のユダヤ教会堂に放火し、またユダヤ人の家屋を破壊した。
- ・ 1939年6月、兵役拒否のため、ニューヨークに渡る。すぐに帰国。

ラインホルド・ニーバーに宛てた手紙

「わたしがアメリカに来たのは間違いでした。わたしは、わたしたちの国の歴史の困難な時期をドイツのキリスト者たちと共に生きなければなりません。もし、わたしがこの時代の試練を同胞と分かち合うのでなければ、わたしは戦後のドイツにおけるキリスト教的生活の再建にあずかる権利を持たなくなるでしょう。」

ヒトラーへの抵抗

- ・ 1939年9月、第二次世界大戦が始まる。ボンヘッファーは、国防軍諜報部の対外連絡員として勤務する。ヒトラーに対する反乱計画に参加。
- ・ 1943年4月、逮捕され、テーゲルの軍用刑務所に入れられる。1年以上。

ラトミラル教授（イタリア人）が伝える 獄中でのエピソード

一人の囚人から、キリスト者として、神学者として、ヒトラーに対する逆行行為の責任をどのように取るかを問われる。酔っ払った運転手がクーアフルステンダムの通りを車を猛スピードで運転しているたとえを語る。犠牲者を埋葬し、遺族を慰めることが牧師の唯一の仕事にはならない。もっと重要なのは、この酔っ払いから無理やりでもハンドルを取り上げるのではないか。

獄中での生活

- ・ 1944年
- ・ 7月20日、クーデター失敗。9月、ベルリン近くのツォッセンにあった諜報部の文書が発見され、ボンヘッファーらの反乱計画への関与が明るみに出る。10月8日、ベルリンのプリンツ・アルブレヒト通り8番地のゲシュタポの地下牢に移される。
- ・ 1945年2月、ブーヒェンバルト強制収容所へ、さらに、バイエルン・バルト、レーゲンスブルク、シェーンベルク、フロッセンビュルクへ。

ボンヘッファーの最後

- ・ 1945年4月9日、SSによる即決裁判、絞首刑。39歳。
- ・ ペイン・ベストに告げた最後の言葉「これが最後です。しかし、私にとっては生命の始まりです。」
- ・ 1945年30日、ヒトラー自殺。



ボンヘッファーの 神学

安価な恵みと高価な恵み (『キリストに従う』より)

「安価な恵みとは、教説・原理・体系としての恵みのことである。」
(p. 1, l. 16 ※配布テキストにおける箇所)

「高価な恵み——それは繰り返し探ね求められるべき福音であり、祈り
求められるべき賜物であり、叩かれるべき戸である。それは、**服従**
(Nachfolge) へと招くがゆえに高価であり、イエス・キリストに対す
る服従へと招くがゆえに恵みである。」 (p. 1, l. 29-32)

※ **Sola gratia 恵みによってのみ** (義とされる) : 宗教改革の基本原則

「キリスト教の版図が拡大し、教会がだんだんと世俗化すると共に、
高価な恵みに対する認識は徐々に失われて行った。世界がキリスト教
化される一方、恵みはキリスト教的な世界の共通財産になってしまっ
た。恵みは安価に手に入れるべきものであった。しかしローマ教会は、
最初の認識の残滓をまだ持っていた。修道院制度というものが教会と
袂をわかたず、教会の知恵が修道院の存在を忍耐深く受け入れたとい
うことは、全く重大な意味のあることであった。」 (p. 2, l. 14-18)

「修道士のこの世からの逃避は、最も洗練したこの世への愛であると
見抜かれた。このような敬虔な生活の究極的な可能性の挫折の中で、
ルターは恵みというものを把握したのである。彼は、修道士の世界が
崩壊した時、神の救いのみ手がイエス・キリストにおいて差し伸べら
れているのを見た。彼はその神のみ手を、「どんなに立派な生活を送
るうとも、われわれのわざは空しい」ということに対する信仰におい
て捕えた。そこで彼に賜物として与えられたのは、高価な恵みであっ
た。その恵みが彼の全存在を打ち砕いたのである。」
(p. 3, l. 15-21)

「ルターの語ったのは、恵みだけが赦しを与えるということであったし、
彼の弟子たちも、言葉の上では同じように繰り返し語ったのであるが、
ただ一つ違っていたのは、ルターがいつも自明のこととして考えていた
こと、つまり服従ということ——それは、彼がいつも、自分は恵みによっ
てイエスに対する最も厳しい服従へと導かれた一人の人間なのだとい
うことを語ったがゆえに、それ以上にはや言う必要のなかったことなの
であるが——そのことを弟子たちが省略して、考えもせず言いもしなかっ
たということである。したがって弟子たちの教説は、ルターの教説から
見て論難の余地のないものではあったが、しかもそれは、この地上にお
ける神の高価な恵みの啓示としての宗教改革の終局かつ否定となった。
この世における罪人の義認は、やがて罪とこの世の義認に変わった。高
価な恵みは、やがて**服従なしの安価な恵み**に変わったのである。」 (p.
4, l. 31-p.5, l. 5)

「**前提としての恵みが安価な恵みであり、結論としての恵みが高価な
恵みである。**一つの福音的な真理がいかに語られ、いかに用いられる
かということに、どういう意味で問題があるかということを認識する
のは、恐るべきことである。ここで言われているのは、**恵みによっ
てのみ義とされる**という同じ言葉である。しかもその同じ原則の誤用
が、その本質の完全な破壊を生むのである。」 (p. 5, l. 30-34)

『ボンヘッファー獄中書簡集』より

「われわれは完全に無宗教 (religionslos) の時代に向かって歩んでいる。」 (p. 7, l. 26)

「宗教的な人間は、人間の認識が（しばしば考えることをなまけるために）行きづまるか、人間の諸能力が役立たなくなると、神について語る。——しかしそれは、もともといつも、急場を救う**機械仕掛ノ神 (deus ex machina)** だ。それを彼らは解決したい問題の見せかけの解決のためか、もしくは、人間が失敗した時の力として、したがって常に人間の弱さを食いものにしながら、つまり人間の限界の所で登場させる。」 (p. 9, l. 13-17)

「知識の探求に明け暮れたその生涯の終局に、ファウストが「われわれは何も知りえないのだということが、わたしには分かった」と言う時、それこそ結論なのであるが、しかしそれは、こういう言葉が自分の怠惰を正当化するために最初の学期に学生によって使われる場合とは全く違う（キルケゴール）。その言葉は結論としては真理であるが、前提としては自己欺瞞である。」 (p. 5, l. 35-p. 6, l. 3)

「僕は、限界においてではなく真唯中において、弱さにおいてではなくて力において、したがって死や罪を契機にしてではなく生において、また人間の善において神について語りたいのだ。限界にぶつかった時は沈黙して、解決し難いことは未解決のままにしておくことがずっと良いように思われる。」 (p. 9, l. 23-26)

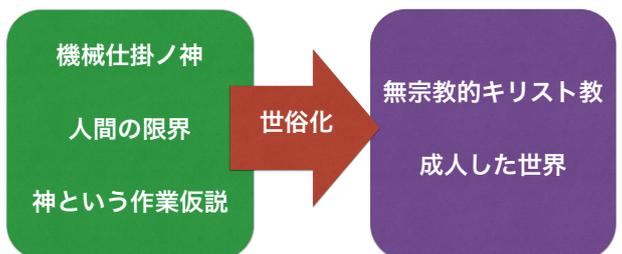
「神はわれわれの生活の真唯中において彼岸的なのだ。教会は、人間の能力の及ばない所や、限界ではなく、村の真中に立っている。それが旧約聖書的ということであり、その意味では、われわれはまだ**新約聖書を旧約聖書から読むことがあまりにも少なすぎる**。こうした**無宗教的キリスト教**がどのような外見を呈し、またどのような形態を取るかについて、僕は今、熟考している。」 (p. 9, l. 27-31)

「人はこの**成人した世界 (mündig gewordene Welt)** に向かって、世界は「神」という後見人なしには生きられないということを証明しようと試みている。」 (p. 10, l. 27-28)

「**神という作業仮説なし**にこの世で生きようとする神こそ、われわれが絶えずその前に立っているところの神なのだ。**神の前で、神と共に、われわれは神なしに生きる**。神はご自身をこの世から十字架へと追いやられるにまかせる。神はこの世においては無力で弱い。そしてまさにそのようにして、ただそのようにしてのみ、彼はわれわれのもとにおり、またわれわれを助けるのである。キリストの助けは彼の全能によってではなく、彼の弱さと苦難による。」 (p. 12, l. 28-33)

「神について「非宗教的に」語ろうとするならば、世界の無神性がそれによって何らかの仕方で覆われるのではなく、むしろまさに暴露され、それゆえにこそ驚くべき光が世界を照らすような仕方で語らなければならない。**成人した世界**はより無神的だが、おそらくそれゆえに成人していない世界よりも神に近いだろう。」 (p. 13, l. 31-34)

獄中書簡のキーワード



総括と課題

1. 偽装された悪に対する洞察
2. 生きた言葉・物語を取り戻すこと：既存の概念の再活性化
3. 結論と前提の区別
4. 日常の言葉で宗教の深みを語る可能性「非宗教的なキリスト教」の模索
5. 神の弱さ・苦しみと救いの逆説的關係：宗教的真理の「逆説性」への洞察

影響史

- ・ 世俗化論
- ・ 神の死の神学
- ・ 他者のための教会 (Kirche für andere)